９．「丹後ちりめんデジタルアーカイブ成果発表会」の記録

京都府立大学地域貢献型特別研究（ACTR）
「丹後ちりめんアーカイブの構築」（代表：小林啓治）
期日：2021 年 10 月 31 日　会場：丹後織物工業組合

１．「丹後ちりめんデジタルアーカイブ」について

こまねこまつり実行委員会
NPO 法人 TEAM 丹波　小山元孝

筆者は、数年前から地域住民が主体となって開催している「こまねこまつり」というイベントに関わっている。このイベントは金刀比羅神社（京都府京丹後市峰山町泉）境内に石造の「狛犬」ならぬ「狛猫」が安置されていることから、「「猫」と「丹後ちりめん」をキーワードに、丹後の人と猫のつながりに思いを馳せて、時空を超えたまちあるきを楽しむイベント（「こまねこまつり」ウェブサイト https://komanekofes.com/ より）として 2016 年から始まった比較的新しいイベントである。そもそもなぜネコなのかと言うと、丹後ちりめんの産地である京丹後市ではかつてその原料となる絹糸を生産するため養蚕も盛んであった。養蚕やちりめん業にとってネズミは大敵であり、ネコが大切にされていたといわれている（『金刀比羅神社御鎮座二百年記念誌』）。京丹後市以外でも養蚕の盛んな地域では、ネズミ除けの御札やネコの絵があり、またネズミ除けの神社も存在している。そもそも狛猫の存在は全く知られていないというわけではなかったが、住民たちはこうした狛猫に関わる由緒を生かしてイベント化しているのである。由緒を地域資源として活用している一つの事例であり、筆者はこの活動の中でまち歩きのガイドなどを行い、普段の研究成果を地域に還元することができた。そもそもこのイベントは、2011 年の金刀比羅神社鎮座二百年祭を期に発足した「ねこプロジェクト」を中心に実行委員会が結成され、2016 年 9 月 18 日に第 1 回「こまねこまつり」が開催されることになった。開催目的の一つに、2020 年が丹後ちりめん創業 300 周年を迎えることから、そこに向けて「峰山から丹後を盛り上げよう。町歩きで風情ある峰山の街並みを楽しんでもらおう」（金刀比羅神社発行『ことひら』第 26 号）という意図があった。しかし、「こまねこまつり」の会議のなかでは、300 年といってもそれを実感することは無いという意見があったのも事実である。そこで、筆者は丹後織物工業組合には近世からの古文書が残っていることや、組合の広報紙もたくさん残っていることなど、300 年の歴史を伝える様々な史料が地元に残されていることを説明した。しかし、「そのようなものは、見たことも聞いたこともない」という声が多くあり、これが実情なのだと

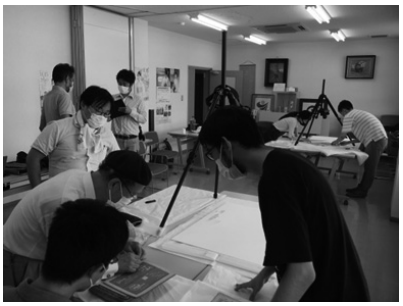

写真１　丹後織物工業組合での撮影風景
（2020 年９月１日）

感じるに至った。300 年の歴史をもつ丹後ちりめんの歴史を伝える文献やモノは丹後各地に多く残されているはずであるが、その多くは、「存在すら知られていないもの」、「話には聞いているがどのようなものかよく知られていないもの」、「見てみたいけどどこにあるのかわからないもの」など、ひっそりと丹後の片隅で存在しているに過ぎないものであった。いずれもその価値は高いと推定できるものの、残念なことではあるがアクセスしづらいことから、これまで多くの目線からの評価がなされていないのが現状なのである。

そこで、丹後ちりめんに関わる多種多様な資料をデジタルアーカイブ化し、多くの方にアクセスし利用できるようにする「丹後ちりめんデジタルアーカイブ事業」を発足した。事業の実施に当たっては、京丹後市史編纂に尽力いただいた小林啓治先生に相談し京都府立大学地域貢献型特別研究（ACTR）を申請することにしたのであった。

デジタル化を想定できる資料群は公的機関、組合、企業、個人所蔵の資料で、文献のみならず布地や原画、写真、動画と形状・媒体は問わないこととした。ただし、現状として多くのデータを収集・蓄積できたとしても、公開するプラットフォームを持ち合わせていないことから、公的機関のもつデータベースとの連携も想定し、使用する言語は日本語を想定しているが、丹後ちりめんは世界各国にも輸出されていることもあり英語での検索を可能にしたいと考えている。

2020 年度は、丹後織物工業組合の協力を得て組合所蔵の大正時代から続く広報紙の撮影や近世文書の調査を行うことができた。その様子は 2020 年 9 月 4 日付け京都新聞（地域北部面）に「丹ちりの文献・技術次世代に」と題して大きく取り上げられた。また、2021 年 2 月 20 日から 4 月 4 日にかけて調査資料の一部が京都府立丹後郷土資料館で展示されることになった。

また福知山公立大学の井口和起先生、崔童殷先生、川合宏紀先生、京都工芸繊維大学の桑原教彰先生のご協力を得て、丹後ちりめんの布地や織見本、また職人の技術のアーカイブ化について調査を始めることができた。その一部はすでに「丹後ちりめんに関する情報のデジタルアーカイブと布の風合い評価システムの構築に関する基礎研究」（『福知山公立大学研究紀要別冊』第 4 号 2021 年）に公開されているので合わせて参照されたい。

こうした経緯を踏まえ、2021 年 10 月 31 日に丹後織物工業組合を会場として、「丹後ちりめんデジタルアーカイブ成果発表会」を開催するにいたった。当日は多くのスタッフの手を煩わせたが、会場をご提供いただいた丹後織物工業組合、また動画の配信を手配いただいた京丹後ちりめん祭実行委員会のご協力なくしては実現できなかった。記して感謝の意を表したい。

2. 丹後ちりめんデジタルアーカイブ成果報告会

（1）オープニング

芝野有純・西明正晃（博士前期課程２回生）

芝野　時間になりましたので、これから「丹後ちりめんデジタルアーカイブ成果報告会」を始めたいと思います。本日、司会を務めさせていただきます京都府立大学大学院生の芝野有純です。よろしくお願いいたします。

西明　同じく京都府立大学大学院生で、丹後に来て以来、着物しか着られなくなって、毎日毎日「着物大好き大好き」と言っている西明正明です。よろしくお願いいたします。

芝野　本当に西明さんは、ゼミにも着物を着てくるぐらいですよね。

芝野　今日は、その鼠色の着物を初めて見たのですけど、新調されたのですか？

西明　そうです。この日のために、誂えました。

芝野　聞くところによると、反物がお家にあったとか。

西明　そうなんですよ。僕、丹後に去年から調査に来て、反物って何なんやろうな、よくわからない。このままじゃ失礼に当たると思って、とりあえず着物着てみるかと思ったのです。ガサガサ家を漁っていたら、その中でこういう反物とかが色々出てきて、母方の家で見つかったのですよ。ちょっともったいないなということで、せっかくだから着物の生地にさせてもらいました。

芝野　研究と生き方が直結しているタイプですね。マスクも、今日は合わせたのですか。

西明　そうですね。これもシルクで出来ていまして、アマビエのはいったマスクです。今の時期にね、丁度ご時世に合うようなものです。このシルクの肌触りが、髭を生やしているのですけれども、全然チクチクしないんですね。

芝野　そんなに着心地、付け心地が良いんですね。

西明　付け心地いいですね。それからですね、先ほど私がそこをフラフラ歩いていたら、周りから「ハロウィンの仮装にはちょっとプププ」っていう笑い声が聞こえてきたのです。そうだ、今日はハッピーハロウィンだと思ってたら、私はハロウィンのコスプレイヤーだと思われていたんですね。

芝野　その突っ込みした中学生めちゃくちゃセンスありますね。

西明　本当に感謝しているんですけどね。着慣れていない僕なんかは、着せ替え人形みたいなもので、「まだまだやな」と思っています。芝野さんは、先ほど着物の展示やっているところで、凄いいっぱい写真撮ってもらっていました。それこそ「コスプレイヤーやな」と思ったんですけど……。凄いカメラパシャパシャパシャ的なね。着て来たかいがありましたね。今日着てるのも、スカジャン着て凄いかっこいいですね。

芝野　これ、スカジャンは私物なんです。

芝野　着物にこう合わせていこうと思って、赤と黒と、そして何を履こうっていうのを凄く考えてきたんです。結局、このブーツを絶対合わせたいって思ったんです。

西明　おもろい形してますね。

芝野　これあの足袋ブーツとかよう言われているんですけれども。何年か前に、メゾンマルジェラっていうハイブランドが、足袋ブーツっていう本当にこのような形のものをださはって、結構いろんな人がそれを履くようになり、他のメーカーさんも作るようになったんです。こういう足袋ブーツというか、和装のデザインがブーツに使われるっていうのも、最近このとなんですね。そうい

写真２　オープニング
（芝野有純・西明正晃）

う動きもある中で、どういう風に丹後ちりめんの歴史を理解し、ちりめんの価値を再発見していくかを考えよう、ということで企画されたのが今回のプロジェクトです。

西明　ほんまですか。

西明　そうですね。芝野さんが全部まとめてくれるから、僕はたらたら喋っているだけというわけです。ここでちょっと座らせてもらいますわ。これからちょっと、台本あるので読ませてもらいましょう。

芝野　昨年より、地元のこまねこまつり実行委員会、それから NPO 法人チーム旦波が主催し、丹後織物工業組合や、京都府立大学、それから福知山公立大学などの協力を得て、丹後ちりめんに関する古文書や資料などをデジタルアーカイブするプロジェクトが始まりました。これは、地元の方々ですらほとんど知らない、貴重な資料が人知れず眠っていることから、その資料や丹後ちりめんの歴史の発掘、その価値の向上を目指して進めているものです。

西明　本日は、その成果の一部を発表いたします。まず、京都府立大学大学院生により、デジタル撮影した資料の解説。続いて、福知山公立大学の崔童殷先生から、丹後ちりめんの生地そのもののアーカイブや職人さんへのインタビューについてお話を頂きます。そして「地域史料のデジタルアーカイブ化とその可能性」と題して、３人の先生方による対談を行います。これから約７０分間どうぞお付き合いの程よろしくお願いいたします。それでは、京都府立大学大学院生の平賀舜太郎さん、どうぞよろしくお願いいたします。

（2）「丹後ちりめんデジタルアーカイブの成果について」

平賀舜太郎（博士前期課程２回生）

失礼いたします。京都府立大学大学院で歴史学を専攻している平賀舜太郎と申します。本日は短い時間ですけれどもよろしくお願いいたします。それでは早速、昨年一年間かけて我々が撮影した資料をいくつか画面に出しながら、お話をさせていただきたいと思います。

今画面に出ましたのは、『丹後縮緬同業組合公報』という表題になっています。1921 年、今からちょうど 100 年前、大正 11 年に「丹後縮緬同業組合」というのが作られました。丹後の織物づくりは、明治時代からそれぞれ小さな機業が一つ一つでやっていました。それを同業組合という形にまとめてやっていこうという動きが明治時代から何度か繰り返されています。大正時代に入って、与謝・中・竹野の３郡で、それぞれに同業組合ができておりました。それを大正 11 年、1921 年の時点で一つにまとめてできたのが、この「丹後縮緬同業組合」ということになります。今回撮影して、デジタルアーカイブにしようとしているこれらの資料は、その時々の経済状況や、統計データ、あるいは政府の経済財政計画であるとか、その他に組合員からの意見の投稿であるとか、そういったことをたくさん掲載して、組合員の間で情報を共有していました。組合として協力してやっていこうという体制を作るために、この『公報』というものが、毎月一回ほぼ欠かさず発刊されておりました。なので「公報」という字は現在よく見る「広める」という字ではなく、「公」に報じるという字になっています。

この写真が創刊号です。1920 年代の丹後震災までの時期のものを中心に今読んでおりますけども、この時期というのは第一次世界大戦が終わって、大不況に見舞われて、戦後の不況か

らどうやって立ち直っていくかっていう時にあたっています。なので、そもそも、３郡に分かれて組合を作っていたものを一つにまとめるということですから、企業家の協力を高めていこうということをしきりに論じております。例えば、この公報全体を通して言えるのですが、各地に組合から視察に出ておりまして、その視察報告を、視察の嘱託を受けた組合員、機業家の方々が残しています。その中でも、やっぱり他の地方に比べて丹後の企業家が協力することへのモチベーションがだいぶ低いみたいだ、我々も頑張っていかないといけない、というようなことがどの視察報告でもたくさん言われております。さらに、組合で協力してどういうことをやっていこうかという時に、一つ一つの機業家ではやっていけないようなこと、例えばその頃問題として浮上してきた労働問題、労働者とどういう風にやっていくのか。また当時職工という言い方をしますが、その職工と起業家がどういう風に関係していくのか。あるいは価格をどうやって下げて競争力をつけていくのか。例えば、それまでは一つ一つの機業家が問屋を通して京都の市場にちりめんを出していました。それだけではなく、消費者とできるだけ近いところで、仲介業者を通さずに販売して価格を下げて、多くの人に丹後織物を使ってもらえるようにするにはどうしたらよいか。あるいは小さな銀行がたくさん丹後にもあったのですが、それでは資金力が心もとない。その金融をどうしていくのか。そういった具体的にどうやって丹後の織物の生産をうまくやっていくかということについて、この公報紙上で議論が戦わされているのです。色々な人が色々な発言をしているということが窺えます。本当に盛りだくさんの内容で、とてもまだまだ全体像を掴むには至っていないというのが正直なところです。

それでだんだん時代が下っていきまして、次にお見せするのが昭和２年４月号です。昭和に入ってすぐ丹後は、丹後震災という大地震に見舞われました。この地域全体が壊滅的な打撃を受けたわけですけれども、丹後の織物もその例外ではありませんでした。この時期は丹後震災からの復興をどうやって取り組んでいくか、京都府や政府からどのようにして支援を取り付けるかといったようなことをはじめ、震災復興をどのようにしていくのかが課題となった時期の公報になります。ただ今までの研究で明らかにされていることですけれども、この丹後震災を機にそれまで使われていた、機械の入れ替えが進んで、丹後の織物、ちりめん生産の能率が非常にあがった。さらに、これから昭和恐慌という大不況の時代に入っていくのですけども、その時代というのは、ちりめんの原料である生糸の価格がだいぶ下がって丹後織物の価格競争力もつき、さらには百貨店がいくつも丹後に入って、そこを通して全国の消費者にちりめんがどんどん広がっていくという、そういう時期にあたっております。丹後震災というのは、まさに災い転じて福となすという側面もあるわけです。そういったことを、この昭和初期の公報からは読み取っていけるのではないかと思うわけです。

また同じ時期に「国練検査実施記念号」と題されておりますけれども、「国練」といいますのは、織物の行程の一つで精練のことです。この精練という工程をずっと明治に入ってから丹後ではできなかった。京都に持って行って、京都の業者が精練をする。それによってはじめて織り上がりがどうであるかということがわかる。何か欠陥が見つかれば、それは商品として受

写真３　平賀舜太郎

け取られずに、丹後に送り返されてしまうということが繰り返されておりました。丹後の織物業にとっては非常に苦しいことが続いていたわけです。そういうことから、なんとかこの精練の工程を丹後でできないかということをずっと模索するなかで、生まれたのがこの組合でもあるわけです。「国練」が昭和３年に実現したことを報じるのがこの公報です。

そのちょっと中身をめくってみますと、当時の組合長である津原武さんのほか、各郡の支部長の方々の写真でありますとか、組合の建物でありますとか、ここに地図がのっておりまして、当時鉄道がどこまで通っていたかとか、そういったことがわかります。当時の写真もふんだんに使われております。そして、時期としては戦争の時代に入っていきます。丹後にとって戦争の影響として非常に大きいのは、「七・七禁令」といいまして、「七・七」というのは７月７日ということですけれども、1940 年にぜいたく品を製造販売してはいけないという法令ができました。これがその 1940 年の公報なんですけれども、その時代に丹後の組合はどういうことを考えていたか。私もこれ読んで、「おぉ」と思ったんですけれども、タイトルがですね、「これからの夫人の服装」になっているんですね。これまで派手なモノ、高級なモノを使って、ファッションセンスを争っていくというような時代だったんだけれども、これからは時世を考えて、派手ではないけれどもいいモノを着ているといふうに、流行が変わっていくはずだ、というような考察をしているんですね。ここから読み取れるのは、単に、「禁止された。どうしよう」とあきらめてしまうのではなくて、そんな時代にあっても何を作っていけるかということを必死で模索していたということなのです。本当に、様々なことを、読み取れる資料がこの組合の倉庫に眠っていたということになります。今回はこの会場でいくつか戦後のものも含めて展示しております。この後の対談でも可能性ということが議論されると思いますけれども、さきほども申し上げましたように、詳細な統計データが、毎月きちんと掲載されています。特に大正時代に組合が発足して以降、ずっと戦前を通して昭和 19 年まで、さすがに戦争の状況が悪化してきて、終戦の前年に休刊になってしまいますけれども、それまでずっと、毎月統計データがきちんと整備されています。これを発掘した我々が詳細な統計をデータ化して推移を追っていくと、戦前の丹後の織物業界の姿がより鮮明に浮かび上がってくる、そういった可能性を持っています。そろそろお時間がまいりましたので、私からは以上とさせていただきます。ありがとうございました。

西明　平賀さん、ありがとうございました。時代に合わせた組合の色々な問題に対する取り組み、しかも前向きにですね、どうしていくか、時代に合わせてどう変化させるかということを考える、非常に良い資料であるということがおわかり頂けたかと思います。

芝野　では続きまして、福知山公立大学の崔童殷先生からお話を頂きます。よろしくお願いいたします。

（３）丹後ちりめん『織物技術のアーカイブ』を目指した試み

崔童殷（福知山公立大学）

今日は、丹後ちりめんの織物技術のアーカイブを目指した試みについて、昨年１年間どのようなことを実行してきのかというところを、少し発表させて頂きたいと思います。主に丹後

ちりめんに関する情報のデジタルアーカイブと、あとはテキスタイルの完成評価システムを構築するってことが、最終的なゴールであります。研究協力者として、様々な方々に協力していただいて、特に京丹後市で古くから織物業界に仕事をしてきた方や、西陣、丹後ちりめんというのは西陣とも関係が深いということで、西陣の伝統工芸士の方々にインタビューしたその内容を少し話そうと思っています。

この研究は、京都府立大学 ACTR の計画の「丹後ちりめんアーカイブ構想」に基づいて、300 年の歴史のある丹後ちりめんに関わる様々な資料をデジタルアーカイブ化してインターネット上で公開できるデータベースを作るという計画をもとにしています。福知山公立大学情報学部ではこの計画に連帯して、主にその技術の部分で、どのような技術的な資料をどう残していくのかというところで共同研究を行い、そこに意義があると思いました。我々は、丹後ちりめんの織物産業の現状を調査し、さらに工程とか、技術的部分をどのようにデータベース化して、これから 100 年、200 年、300 年といったもっと長い歴史の中で後世に継承していくのかというところを考えたいと思っています。今、このようなたくさんの資料を見せて頂いて、本当にびっくりするくらい、嬉しくて仕方がないです。このような資料を我々がどのように見つめていって、新しい今の IT 技術を応用することによって、今後もっと素晴らしい技術の継承ができるのではないかと考えました。

そこで、たくさん資料があるのですが、どのような資料を今後技術アーカイブに残すことが出来るのかということを考えました。私の目に留まったのは、このような織物の生地、パターン、サンプルです。あとは紋紙。それから織物の設計図。そのようなものが、私の目には留まりました。実際、この丹後ちりめん産業の現状については、色々なジャーナルなどから歴史をたどっていくということが出来ると思います。自分自身が大学を卒業して、実際にテキスタイルデザイナーとして織物を設計していくというなかで、組織のこととか、パターンのこととか、技術的な面を残していくことが、どれほどエンジニアにとって、またデザイナーにとって大事なことだというのを、身に染みて経験しました。たくさん残っている貴重なデータを、今の時代に生きている我々は、後世に残すためにどのようにすればいいんだろうと。そこで私が考えていたのは、この資料が見えるでしょうか、見本帳です。この中身が非常に重要で、テキスタイルに関して設計に関すること、密度とか、パンチとか技術に関するものが詳しく書いてある。そこに、生地のサンプルも貼っている。これ以上に良い遺産があるのだろうかと私は思いました。いま京都府織物・機械金属振興センターが持ってらっしゃるこの資料のリストをみると、生地の設計図が大変貴重なデータとして実物と共に残っている。このことに大変感心しました。

これをきっかけに、伝統技能士である吉田さんや西陣のジャガード織物の技能士である主に紋紙を作っている方、こちらの方々にインタビューしました。そこから得られた調査の結果でわかったこと、我々今の時代は「伝統」と言いますが、当時の方々は、それは「生計」であり、食べていくための一つの技術でありました。生きていらっしゃる技能士の方々が、生計をたてるために、身につけてきたその技術というのは、どこかで習ったこともなく、自然に身につけられた技術。人間が作ってきた感性や勘、技、このようなものは、やはり数値にできないものですね。そのようなものを、今後誰かにまた教えないといけないという、大事な、貴重なところがでてくるのですが、そこをどうするのか。色々なところで、この文化技術を継承するため

に、沢山の若者に声をかけています。でも、若者と、伝統や実力、技術を持っていらっしゃる方々の高齢化があり、ここの繋ぎがちょっと悪いということですよね。だから非常に、技術の残し方、継承というのが非常に難しいというのが現状です。そこでですね、彼らに実際に伝えるためにも、いろんな場を借りて何かを教える、さらにそこでちょっとコミュニケーションする、そのような時間をもっと持ちたいと思っています。

写真４　崔童殷

あとは、技術的なアーカイブに伴って、これは西陣の方と作り上げたその織機、世界で一台しかないんですけれども、西陣の大事な 300 種類の織物組織をデータ化して、私が作ったものなんです。またジャガードも簡単にスキャンして、意匠図を作ってデザインを仕上げるということが、前からずっとやってきた研究です。このような試みから、今後は丹後ちりめんの大変すばらしい生地を全世界の人に広めたい。なんで全世界の人に広めるのがこんなに難しいのか、というところで、たくさんの方々が悩んでます。世界的な遺産の技術をどう継承できるのか。あと、皆さんも大変、コロナで大変な想いをしていらっしゃると思うんですけれども、非対面ビジネスモデルの必要性が高まっていますね。こんな時に、都心から離れている伝統工芸品として、この生地をどのように価値を与えて、あと感性的な面で、デザイン、風合いとか、このようなものはどうやって伝えるの？というところにやはり課題があるんです。世界の多くの人々に、丹後ちりめんの凄さを知ってもらう、というところで考えているのが、まずこの風合いのデジタル化、デジタルアーカイブへの試みをしました。まずは生地を三次元で表面をスキャンして、それを映像や、シュミレーションといった技術を取り入れれば、それを紹介するホームページへの広告、広報、そのようなところで主に使える。今後、素晴らしいこの丹後ちりめんを、技術や風合いのこととかも含めて全世界の人々に知らせて、さらにビジネスにも繋がるということが出来るのではないかという、ちょっと大きな夢ももっています。

この伝統技術を継承するというところで、我々が今何をすべきなのか。私が一人で頑張ってもできないわけです。伝統技術者もかなり高齢化が進んでいます。その方々に出会うと、彼らはとにかく自分たちが持っている技術を後世に残したいんだと、その思いがすごく熱いんですよね。しかし、環境が整っていない。どのようにすればいいのかわからない。というところで我々がもう少し耳を澄ませて、そこの意見を取り入れることが大事じゃないかと。様々な設備が老朽化して、職員の高齢化、若者の継承者がいない現状から、文化的な遺産の継承というのが、今ものすごい課題になっています。古い歴史とか、技術に関する資料の扱いに関しても、コンピュータ技術の発展からデジタルデータへの保存というのが必要となっております。この計画と共に今後このようなアーカイブというのを目指して、もっと AI のような技術も取り入れてアーカイブ化を目指したいと思っています。

（4）シンポジウム「地域史料のデジタルアーカイブ化とその可能性」

井口和起（福知山公立大学）・小林啓治（京都府立大学）・福島幸宏（慶応義塾大学）

福島　只今ご紹介にあずかりました、慶應義塾大学の福島でございます。これからの対談は、マスクを外させて頂いて距離を十分とって少しお話をさせて頂ければと思います。時間が押しておりますけれども、この対談 40 分お時間頂いておりますので、15 時 20 分くらいまでお話をしていきたいと思います。京都府立大学の小林さん、福知山公立大学の井口さん、ここでは、「さん」呼びでやっていきたいと思います。

まず、自己紹介を兼ねて小林さんから今のお取組みとか、丹後との関りとか、そのあたりからお話頂ければと思います。よろしくお願いいたします

小林　京都府立大学の教員の小林と申します。私はもう長い間、10 年以上前から、丹後の特に戦時体制を研究しております。木津村の村役場文書を中心に研究をしてまいりました。今回、京丹後市役所の小山元孝さんから「丹後織物工業組合に戦前からの公報がたくさん残されているので、それをなんとか紹介できないだろうか」というお話を頂きました。丹後ちりめんの歴史については、大雑把なことは皆さんわかっていらっしゃるようですが、もっと詳しく知りたいという希望があり、地元の歴史をもう一度足元からですね、掘り返してみて、どんなことが言えるか学びたいという、そういうご要望があるということで、私たちも協力することにいたしました。

京都府立大学には、「地域貢献型特別研究」（ACTR）というものがありまして、その補助金も頂いて、公報誌を撮影して参りました。先ほども説明がありましたけれども、1921 年から現在まで、名称は「丹後縮緬」から戦後に「丹後織物」と変わりますが、100 年間くらいこの公報誌が刊行されております。この公報誌には非常に詳細な論説と、詳細なデータが掲載されているんですね。これはちょっと他には見られない。この公報誌でしか把握することが出来ない、100 年間の丹後ちりめんの歴史について、非常に集約されたこれらの情報を読み解きつつ、地元の方々だけではなく、日本・全世界を視野に入れてですね、知って頂きたいということで、この調査・研究がスタートしております。現在、やっとほぼ全部の資料の写真を撮ってデータ化したという状況にありますので、その報告も含めて、今後どういうことができるのかを、井口さん、それから福島さんと一緒に考えていきたいと思います。

福島　はい、ありがとうございました。朝から見慣れるようになってちょっと突っ込むのを忘れていたのですが、今回先ほどの院生さんと同じように、僕初めて見たんですけれども、小林さんも和服を着て頂いていて、なんかすごく立派な感じになっているんですが。

小林　僕も初めてですね、この格好をしたのはまったく初めてですね。

福島　たぶんプロフィール写真も明日から、京都府立大学のプロフィール写真もこれに切り替わっている予定だと。

小林　そうですね、是非そうしたいと思います。印象から言うと、もっと窮屈かなと思ったんですけれども、着てみるとほとんど違和感がなく、寒いかなと思ったけれどまったく寒くもなく、これから入学式とか卒業式とかこれで行ったら目立つかなと思っております。

福島　既に院生さんが一人この調査をきっかけにはまっているということで、ちょっとずつ

研究室で増えれば。

小林　私もはまってみようかなと。

福島　では、福知山公立大学の井口さんからお願いいたします。

写真５　シンポジウム
（左から小林啓治・井口和起・福島幸宏）

井口　皆さんこんにちは。福知山公立大学の井口と申します。私は丹後との繋がりはそんなに新しいことではなくて、1982 年ぐらいからです。先ほどの小林さんと同様に、近現代史が専門ですから、この時代の丹後の戦時体制の資料が残っているということで、最初にお尋ねしたのは峰山町の丹波地区という、丹後に丹波があるのはおかしいと思われるかもしれませんが、決して古い時代をたどるとおかしい名前ではないのですが、その丹波地区の公民館に残っている戦前、戦時体制下の資料を少し整理しました。丁度私その時期は京都府立大学に勤めておりましたので、その生活文化センターというところで出している年次報告に兵事関係の資料を極簡単に２号に渡って紹介したのが、最初の私の丹後とのお付き合いです。

そのあと、先ほど小林さんがおっしゃいました、木津村の資料にも当時中心になって管理されていたのは吉岡初男さんという方でしたが、その方と連絡を取りながら、そこでお仕事をさせていただきました。立命館大学の方々とご一緒にやったのですが、それについては「前線通信」という文書がありまして、兵隊たちが村によせた沢山の手紙、その要点をまとめた論文を立命館大学の人文科学研究所の紀要に書かせて頂いたというのが最初の頃のお付き合いです。

その後いろいろありまして、現在は福知山公立大学に移りました。そこで新たに情報学部を作ったときに崔先生がお見えになったので、これはもう大変嬉しくなりまして、「崔先生、どうだ、丹後にこういう繊維の資料があるんだよ」、先生は西陣でおやりになっていたことを存じ上げていましたので、声をかけましたところ快く引き受けてくださったので、じゃあご一緒しましょうということになりました。崔先生のお仕事を脇で見ながら、こういうものをデジタル化で残せるのかどうか。とくに私など、一番わからなかったのはちりめんの「織」はわかるんです。布の「風合い」と言われると、これはなんだと。どうやって残すのか、そんなもの残せるのかというのがよくわかりませんでした。小林さんたちのお仕事が、いわば文書をデジタルアーカイブによる保存と利活用をお考えになる。私自身は、日本近現代史の専門と同時に、京都府立総合資料館といった時代からアーカイブズの世界に首を突っ込んでおりました。なので、文書のアーカイブズは割合理解できるのですが、伝統的な技術だとか、布だとかのデジタル化と保存、さらにその後の活用、こんなものはどう考えたらいいのかなと思いながら、このシンポジウムにも参加させて頂いているというのが、私の自己紹介です。どうぞよろしくお願いいたします。

福島　ありがとうございます。それぞれお二人から、最後の方の、井口さんのお話の最後に出てきたアーカイブズというお話は少し後ろにも繋げて、お話できるかなと思っています。私は福島と申しまして、少し思い出していたんですけれども、25 年前に木津村の吉岡さんのところに、井口さんに連れてってもらって、無茶苦茶美味しい魚を食べたっていうのが、どうも

最初の丹後経験だと思い起こしました。

私自身ですね、なんでここに座っているかというと、京都府の職員をやっておった時代がしばらくありまして、その時に、先ほどの崔さんのお話の最初の方に出てきましたけれど、京丹後市史をおやりになっていた小山さんに色々教えて頂いて、調査チームの一員として少し丹後に来ておりました。その後あまりきっちりお仕事できていなかったんですが、いろいろ地域のアーカイブとかですね、デジタルアーカイブどうしたらいいかというところで、少しお手伝いできることがあればなというところが、今の私の立場ということで、こちらに来ておるということになります。

それで、小林さん、先ほどの井口さんの少し大きなところからのお話を受けて、特に京都府立大学で調査されていたのは主には公報だったわけですが、他に崔さんのところの布地の話がありました。他に丹後ちりめんの織物の話について、これはアーカイブしていかないといけないとか、地域の資料としてこういうことは重要じゃないかというお気づきのところを広げて頂いてよろしいでしょうか。

小林　はい、今回は公報を中心に見てきました。その他にも、京都府織物・機械金属振興センターがこの近くにございますけども、そこに見本帳というのがあります。生地の一部分を張り付けて基礎的なデータとともに綴じてあるんです。これは明治・大正からあると思いますが、例えばデパートができたころには大丸にどういった生地を卸したかということがわかります。博覧会にも色々出しておられる。そういった見本帳というものがかなりの量で保管されています。だから、公報も非常に大事なんですけども、そういった見本帳みたいなものも合わせてアーカイブしていくと、視覚的にも良いし是非やらねばならないと思っています。

福島　ありがとうございます。見本帳というものがでてきましたけれども、井口さんの方から具体的に、その地域のアーカイブ、丹後の織物で考えるときに、もう少しどういうものが必要かということも、ご意見いただいてよろしいでしょうか。

井口　先ほどの崔さんの話、私もわからない部分もあるのですが、布のようなものをデジタル化するという場合には、恐らく最近のデジタル技術が極めて急速に進んでいるということがまず大前提で、それに支えられてデジタルで残せる分野というのが、どんどん増えていくのではないかと思っています。ちりめんがもちろん今回のテーマですけれども、ちりめん以外の分野もどんどん残すことができる。さらには、あれ何て言いましたっけ、三次元のものがそっくりという。

福島　フォトグラメトリーとか最新の技術。

井口　作れるじゃないですか。どんどん偽物を作ったらどうなのかなんて、つまらないことも考えますが。そういう技術の急速な進化で残すことができますね。これはとっても大事なことで、残すというより保存するという。残すというのはそれで半分くらいは出来ると思います。今回の公報の文書の写真もそれで出来ると思います。とはいえそれは中身が読めるということであって、物自体が残あるということにはなりません。一方で災害がしょっちゅう起こる。特にこの地域はあまり知らないのだけれど、私が今いる福知山ではしょっちゅう水にやられるという中で、現物が水没してしまうとこれは大変困る。どうしても現物は何らかの形で残さなければいけないという課題があるので、それをどう残すのか。どの地域にとっても地域文化のデ

ジタル化と保存と利活用というところと同時に、現物をどういう風に残すのかという仕事は必ずどこかで出てくるので、今後この問題は、住民の皆さんと、行政の皆さんとご一緒に考えていきたいなと、そんな風に思っています。ちょっと答えが横道に逸れたかもしれませんが。

福島　いえいえ、そんなにたくさんの時間があるわけではないですけど、最後の方でその、現物の話まではたどり着きたいなと思っているところがあります。

今おっしゃっていただいたところだと、例えば、公報、見本帳、崔さんのお仕事である布地関連でもあって見本帳のお話、もう少し広い意味の現物というお話まで来ていると思うんですけれども、例えばその京丹後市の場合は、「京丹後市史」でかなり綿密な調査をやられていて、例えば建物の調査とかも、かなりのしっかりした調査をおやりになって報告書も出ています。たぶん報告書の手前の資料も綿密に写真を撮られて、図面も取られてたと思いましたので、市史のデータとかも上手に使いながらちりめんとかの話もいろいろ再構成できるかなと思っています。もちろん、市史でもしっかりちりめんの話を書かれているのですが、それが地域の文化の話までいけるのかなと思ったりしてお聞きしていました。

まずあまりテーマに沿わずに、お二人が言いたいことを先行していただいて、後半につなげていきたいのですけれど、どちらからいきましょう。小林さんお願いします。

小林　公報の写真をとってデジタル化していっているのですが、問題はそれをどういう風に公開していくかですね。そのプラットホームをどのように作っていくかというのが非常に難しくて、いったいどこにこれを載せていったらいいのかという課題があります。恐らくそれはいろんなところが抱えている問題だと思います。例えば、京都府の歴史にとってちりめんは非常に重要な部分を占めるので、京都府立京都学・歴彩館などがそういうプラットホームを準備してくだされば非常にありがたいのです。

それから、もう一つ。調査してデジタル化し、仮にプラットホームができたとしても十分とはいえません。最近、「歴史を作る」という言葉も使われるようになりましたけれども、地元の皆さん方と、どういう風に一緒になってそのデータを活用して歴史を継承するかということが問題になってきます。ちりめんに限らず、おそらく眠っている資料（史料）はたくさんあると思うんですよね。そういった身近に持たれているちりめんの資料（史料）というのは、何も文書ばかりじゃなくて機械がそうですし、そういうものをどうやって集めて、皆さんの参加のもとに歴史を作っていけるような仕組みをもつことができるのか。バーチャルにせよ、実際の博物館やミュージアムみたいなものにせよ、どちらもいかに参加型のものにするのかというのが、今後の大きな課題になっていると思います。それこそが、文化の継承でもあるし、文化の活性化に繋がっていくんじゃないでしょうか。

福島　ありがとうございます。かなり実はたくさんのことが、ちりめんというものに関連して、まずモノだったりデータがとれるものだったり、たくさんあるというお話し。それと共に、例えば公報からのお話からのスタートでしたけれども、どう載せていくかという、プラットホームの問題ですよね。歴史を作っていく、例えば今だとパブリックヒストリーという考え方も、少し日本でも広まってきていますけれども、そのお話に関連して地域の方、関係の方と、どういう風に歴史を作っていけるかという、３つくらい大きな課題をだしていただいたと思うんですが、井口さんのほうから、今の話に関連してでも結構ですし、全然違うところからでもお願

いします。

井口　まず、小林さんからそのような話聞くと私は自分が責められているような気がします。実は福知山公立大学学長という肩書が中心ですが、私もう一つ京都府立京都学・歴彩館顧問という肩書があり、そこの仕事も少ししています。先ほどのデジタル化したけれどもプラットホームどこへ作るんだと。そもそも京都府立大学の文学部と、歴彩館と同じ建物にあるんだし、しかも京都府の住民の資料については、もともと総合資料館と言って作ったときには、それが中心の課題だったわけですから、是非ともそこが引き受けるべきだと。こう小林さんからご指摘を受けたので、勿論そこにも館長さんをはじめ、お願いをいたしますが、知事をはじめですね、京都府さんにも強くお願いをしていきたい、努力はしていきたいと思います。なぜなら、先ほどからお話が出ていますように、単に織物の機械や織物の布の話だけではなくて、また織り方の話だけじゃなくて、それを作っている機械を修繕するための人々というのは、この地域に機械工業を早くから成立させている。この地域の人々の技術と文化、社会と文化そのものの中核にある部分なのですよね。そうすると、この地域の人々の生活と文化と歴史をどのように語りついでいくのかというと、これはもう必須のお仕事になるので、ぜひとも進めて頂きたい。そういう施設の中心としていえば、先ほどの現物史料との保存の問題でいえばちりめん資料館みたいなものをなんとかして丹後地域につくれないのかなと。そうしたら福知山市も、近世以来明治、大正の時期までは福知山だってずっと繊維産業が栄えていたわけですから、丹後・中丹地域を含むんですよね。いま京都府には丹後郷土資料館ございますが、そこの容量やお仕事だけではとてもできませんので、ちりめんの世界ということに限っては、せめて廃校を何とか利活用しながらでも作れないのかというのを、非常に強く感じます。言いたいことは全部言えということだったので。

福島　そうですよ、今言っていただかないと

井口　時間がなくなるといけないので、そうやって仮に資料館なり博物館を作ったとします。が、国立民族博物館館長の吉田憲司さんが書かれた『文化の「発見」』という本がありますが、その中でアメリカのダンカン・キャメロンという美術史家が唱えたことを発展させて、こんなことを言われている。元々の博物館はテンプルだった。つまり、もう価値が決まっているありがたい宝物を拝みに行くという、そういう博物館があったんだけども、現代でいえばもう一つの種類の方、いわばそういうお寺にもお参りするような話ではなくて、フォーラムとしての博物館だと言われている。つまりどういうことかというと、そこへ行って、未知の価値を発見し、そこからみんなで議論を始める。そういう博物館が世界的な運動になっている。去年京都で開かれたICOM(アイコム：国際博物館会議）という世界会議でも、これが中心課題だったというのも覚えています。そんなふうな活動をする、そういう資料館くらいのですね、夢のある大きなものを、京都府さん考えろよと言いたい。これあとで見られたら京都府から叱られるかも知れませんがね。

福島　これしばらく残りますから、僕事前に言いましたよ。アーカイブ残るって。

井口　それはまぁわかっています。でも考えてほしいと思っています。そのためには、やっぱりこの地域の人びとも、私たちと一緒にですね、本気でそれをみんなで残していこうよというまちづくりをお願いできればありがたいなと思っています。勝手なことをいいました。

福島　いえいえ、テンプルからフォーラムへって話は博物館とか、歴史学とかやっていると、比較的に共通理解になっていて、日本だと伊藤寿郎さん以来の市民の博物館論ともつながっているとも思います。じゃあ、そういうことをもとに本当に実践できている博物館があったりするのかとか、歴彩館もそうですし、それから受け取っていただけるその地域の方々とか、市民の方々に向かってもきちんと説明できているかというと、まだまだ怪しいところがあります。その話は、先ほど小林さんに言っていただいた歴史を作っていくというか、パブリックヒストリーの営みと結びつくようなところまで言っていただいたと思うんで、そのためのちりめん資料館という話が出てきたと思うんですけど。

このイベント自体が本当は去年出来たらよかったんでしょうけれど、丹後ちりめん300年ということでしたし、改めて今日最初のお話にもありました、小林さんも触れられてましたけど、1921年の同業組合が出来て、100年ということでもあります。また、もう少しすればこの地域にとっては非常に重要な丹後震災100年がそろそろ近づいてきてるわけです。そういう時間軸というものを我々頭において少しお話をしました。

また空間の広がりで言うと、先ほど井口さんも触れて頂いたように福知山市とかも入ってくる。あの、ちりめんの話しを考えるとそうなんですが、これって別に京都府に限った話ではなくて、兵庫県なり福井県なり周りにも広がっていきます。もしかしたらグンゼのこととか考えれば、日本に留まらないようなことでもあるような気がします。そこら辺の空間の広がりとか、それから小林さんちらっと言っていただいた、見本帳を通じた販路みたいなことを考えると、空間的にどこまでいけそうか、そのような話をもう一巡出していただきたい。今見られているご研究の範囲、もしくは先行研究の範囲から、どの辺まで話が作れそうだとお考えでしょうか。これはやっぱり小林さんからいった方がいいですかね。井口さん、どちらがよろしいでしょうか、いや、小林さんから。

小林　難しい言い方をされましたけれども、わかりやすくいうと、先ほど公報に統計が出ていると言いましたけれども、例えばどこから女工さんが来ているかということですよね。そういうのも統計に出てきます。最も多いのは、やはり一番近い但馬ですね。

福島　でも、それいきなり県境超えて兵庫県ですよね。

小林　県境は境界としての意味は小さいので、但馬が多いわけです。それから、鳥取がその次くらいだったか、ちょっと記憶が正確ではないですけれど。鳥取とかあるいは福井県、これらはおそらく日本海つながりで、そういう地域性、地域の連関性があると思うのですが、女工さんはいろんな地域から来ている。それから、もう一ついうと、朝鮮人の方ですね。戦前は朝鮮を植民地支配していますから、内地にやってきた朝鮮人もそこで雇われて仕事をされているので、空間的にはもう植民地まで入っている。

福島　帝国日本のはい、

小林　そうですね、広がっていく。あともう一つは原料ですよね。生糸がどこから入ってくるのか。これは私も全然よくわからないので、おそらくこれ時代によって違います。戦後になると輸入ですよね。輸入された生糸がどんどん入ってくるようになるので、その辺のことは時間によって、空間の広がりも変わってくるので、一概には言えない。そういうことを追っていけば、いいのではないかなと思います。

福島　ありがとうございます。ちょっと無茶ぶりだったかとおもいますけど、井口さんの方から今の空間の話を。

井口　もっとひどい振り方だと思うんだけど、丹後ちりめんそのものについては、いうまでもなく前からあがっている。例えば京都市内とのつながりは、近世から現代にいたるまで、つながりはもう欠かせないことですから。京都府全域になるのは言うまでもないことなのです。ちょっと話が飛びますが、グンゼの歴史を見ますと波多野鶴吉さん苦労するんですよね。どう苦労したかというと、要するに、他の企業とどれだけ戦えるかという話で、しかも販路として考えた場合は、国際的な競争に勝つために、イタリア製品や横浜市場で勝てる品質のものにするかの競争と、そのための金融に非常に苦労するわけですよね。そんな風に見ていくと、原料の問題もそうですし、販路の問題になりますと、もともと織物の販路は世界に広がっていたわけですから、その世界にどれだけ太刀打ちできるところまでいくかということになる。そんな企業が、丹後から起こっているということは、そういう見方をすれば帝国日本の範囲を超えて全地球に広がるという風にさえテーマによってはなる。まさに世界に繋がる。世界の中の丹後、逆に言うと世界をこのちりめん研究からどれだけ探し出せるか、気が付けるかということになるのではないか。ちょっと大きな話をし過ぎましたが。

福島　いえ、期待したようなお話をほんとすみません。多分そうなると思って振ったところがあったんですけれど、ありがとうございます。

でも本当におっしゃっていただいた通りで、小林さんが最初に出していただいた見本帳の話って、結局デパートに売って、デパートがじゃあどこに売るかって、今まさに井口さんおっしゃったような世界戦略の武器になっていた時期。僕とかが見ていると、占領期かなと思ったりするところもあるんですけれど、本当に世界に広がってて、たぶん丹後ちりめんの実物が残っているところを探してみましょうてなったら、恐らく世界中のいろんなところに残っている。博物館の建物に使われているとか、博物館に残ってましたとか。そうじゃなくても、大きなお家とかにたくさん残っていても良いだろうと思うので、もしかしたら先行研究しっかり探していけばそういう指摘もされているかもしれない。そういうことを改めて位置づけてみる、もしくはデジタルで見えるようにしてみるっていうことは、色々な可能性がありそうだなと気がついているところであります。

多分、デジタルで丹後ちりめんの情報をここにあるモノだけじゃなくて、世界中のデジタルで出ているモノを検索にかけて集められるバーチャルのミュージアムみたいなことはたぶん構想できるしいけそうな感じがします。今までいろんなことを試されているのを知っているので、それがより良い形で出来そうな感じがするので、そういうことをまずスタートで考えたいと思っています。

今日は、まず時間軸を追って、そしてその対象になる地域のアーカイブの対象になる種類を増やしていって、さらに空間の広がりの話をして、「世界の中の丹後」、「丹後の中の世界」という言葉が飛び出してきたわけです。最後にそういう今までの議論含めて、今後どういうことができそうかみたいなお話。今までのお話と被っても結構ですがお願いします。

小林　はい、同じことになりますけど、そうですね、皆さんが所有されている資料をできるだけ集めたいなというのがまず一つです。それから、ちょっとはずれるのですが、この公報を

撮影していて私たちがよく理解できていいないのは製造工程です。全然専門外なので、ちりめんがどうやって製造されるのかという、そこ自体がよくわからないまま史料を見たりしています。これから先、基本的なことがどんどんわからなくなっていくでしょうから、基本的な工程みたいなものを、工場のシステムみたいなものも含めてね、どうにか記録として残せないかと考えています。1928 年にこの組合が作った絵葉書をそこに展示をしてあるんですが、こういう情報も重要です。文字史料ばかり今日は展示したんですけど、幸いに広報には広告が多いんですよね。機械の宣伝がものすごく面白いですね。そういった広告を出している工場が、どういったところの会社で、どのように変遷しているかを見ていっても、非常に面白いんじゃないかと思います。それからもう一つ、ちょっと先ほどの話に戻るんですけれど、空間の問題で輸出の話がでました。公報を見ていると、1930 年代には輸出が大きく問題になるというか、課題になっています。組合として輸出をどう推進するか、ということが、戦後じゃなくて戦前からかなり意識的に取り組まれています。

それともう一つ、これ感想みたいな話になるんですけど、ちりめんの公報を分析していくにあたって、実際に工場を見てみないといけないということですね。現在のちりめんの生産現場、それから流通を担われているところ、そういうようなところにも私たちは見学に行き、お話をお聞きしました。実際に機械を見てみると、今井口さんが言われましたけれども、修理をどうするかという問題は非常に大きいんですよね。「これ何年くらい前から使っていますか」と質問しましたが、ものすごく長い期間使われていて、現在 SDGs とか言われているけれども、持続性のある経済発展みたいなことを考えたときに、ちりめん産業は注目すべき製造工程を持っているんじゃないかなと思いました。

福島　ありがとうございます。最後のお話なんか、すごく、視点が逆に、設備更新してない部分が重要なんじゃないかというそういう話はすごく大事な。はい井口さんどうぞ。

井口　もう時間がない。

福島　あまりお気にせずやっていただきたいと、はい。

井口　もう一つだけにします。本当に伝統的な技術、それは機械も含めてですが、どういう風に残すか、どういう風にして作られているのか、崔さんと京都工芸繊維大学の桑原先生ともいらっしゃるので、その先生方に工程の入門をご一緒に教わっていただければ。そのうえで、崔さんの悩み事なんかを聞いていて思うのは、機械ではできない、伝統の、個人でやられていることは、例えば紋紙をちょっとデジタル化するために見せて頂けませんかとか、ちょっとといっても門外不出ということで、なかなか公開して頂けない。そのため、もしその方がお年を召してできなくなった段階でも、若い人にどうして伝えて、跡継ぎはどうやったらできるのか、その困難をどっかで乗り越えるための努力を本当に地元の方できるのか。我々がどれだけ信頼してもらえるかにもかかわるのですが、進めていかないと難しいんじゃないかなという印象を持ちながら、それでもくじけずに頑張っていこうやというのが、私の今の最後の感想です。

福島　ありがとうございます、あの最後出たお話は、地域の資料のアーカイブという今日のお題全体にすごくかかわっています。ダークアーカイブという言い方を我々しますけれども、まさに信頼を得たうえでないと難しいんですけど、しばらくの間出さないというお約束で、データを取らせて頂く。記録を残させていただいて、何年、何十年後かに出していきますという

記録の取り方が、もう少し一般的になってもいいと思います。そのためには信頼されること、それからお預かりしたデータを長いこと管理できる仕組みが説明できるように整えておくこと。ということは多分大学だけではできないので、地方公共団体とか、あるいはデジタルアーカイブのプラットホームということでいうと、今国が大きなものを準備していますので、そこにどうやってつなげるか。少しダークアーカイブの問題とかも出てきて、解決の方法をちょっと探っていけるかなという風には思ってお聞きしておりました。頂いたお時間すこし過ぎましたけれども、２人の対談をおしまいしたいと思います。井口さん、小林さん本当にどうもありがとうございました。

井口・小林　ありがとうございました。

芝野　先生方どうもありがとうございました。皆さまいかがでしたでしょうか。丹後ちりめん歴史、それからデジタルアーカイブのもつメリットやその課題などが詰まった濃い対談だったと思います。丹後ちりめんデジタルアーカイブは、まだ始まったばかりなのですけども、地域の貴重な資料をオープンにするとともに、地域の多様な歴史を掘り起こす取り組みに繋がっていければ良いと考えています。どうも、本日はご視聴ありがとうございました。丹後ちりめん祭りチャンネル、チャンネル登録よろしくお願いいたします。ありがとうございました。